作者プロフィール
柚木 文夫氏　千葉県隊友会会員 習志野支部長 桧町陸幕 平成 2 年退官 1958 年防衛大学卒
元防大山岳部監督 現自衛隊山岳連盟会長

秩父槍ヶ岳－中津仙境に聳える寂峰－

中双里から仰ぐ秩父槍ヶ岳

奥秩父の西北端に位置し、中津川を囲む山域は、交通の便も悪く、登山路も殆ど未整備の、いわば登山未開地とも言える一画である。人はここを中津仙境と呼ぶ。この仙境の秩父槍ヶ岳(1341m)と南天山(1483m)を泊りがけで登ろうとの誘いに乗り、11 月中旬、友人の車に乗せられて出かけた。

中津川集落の民宿・駒鳥山荘に車を置いて、初日は中津川南岸の秩父槍ヶ岳、2 日目は同北岸の南天山に登る計画である。

秩父槍ヶ岳は、2 万 5 千地図「中津峡」の上端中央付近、岩崖記号ひしめく中に記された 1341m 標高点がそれだが、山名の記載はない。山と高原地図には「槍ヶ岳」の標記があり、相原橋を起点として直路、東面岩壁を頂上に突き上げる点線路が記載されているが、今はこのルートは崩落して立入禁止とのこと。従って今回は、北面・中津川集落からの登路を探し登ることにした。

民宿の裏から眺めると中津川の対岸に、小さな神社の鳥居が見える。あの神社の右脇に登り口があると地元の人から教わり、11 時出発。

まず中津川渡河に難渋。水深は 15～20cm だが幅 10m の流れがどうにも越えられず結局、靴を脱ぎズボンをたくし上げてジャブジャブ歩いて渡った。

中津川に面した神社の鳥居のすぐ右脇からジグザグ登路が始まる。薄暗い杉林の中、最初からアキレス腱が痛くなるような急登である。11 時 40 分、小若沢出合に出て小休止。その後は概ねこの小若沢に沿って、とんでもない急斜面にジグザグに付けられた覚束ない踏み跡を探り探り登る。

TV アンテナのコル

13 時、やっとTVアンテナのある主稜線鞍部に飛び出した。若干の見晴しがあり、中津川対岸の南天山が、昼の日差しに凛々しく映えて見えた。

ここから主稜線の狭い岩尾根を左に辿る。ヤセた岩稜の急なピークを立ち木につかまりながら 2 回登り降りし、三つ目のピークに攀じ登ったら、そこが秩父槍ヶ岳山頂だった。13 時 15 分。四周が切り立った 5～6 人がやっと立てる程度の狭い山頂は、木立ちに遮られ展望もない。ただ、木の間越しに両神山とそれに続く赤岩尾根が、視界を圧して確認できた。同じ経路を下山し、15 時半、民宿帰着。宿のオバサンの笑顔に迎えられた。

秩父槍山頂

秩父槍山頂から望む両神山